学齢前児童の発達と教養

写　家　入　澤　宗　壽

ようなって居ないから、理由では承知しながら、
自然反対なやり方をする事があると思うから殊更
取り出して云ったのである。

児童の研究は転近に於て非常に進歩した。殊に
幼児の研究は割合に早くから手をつけられ、精
神上の発達について詳細なる記述といふに止めり、
居るが、或は単に綿密な記述といふに止まり、
或は個々の能力の発達の記載であって、総合的に
個性の発達を叙述したものが甚だ少ないのは教育
とか保育とかの方面に取つては懐み無き能はすで
ある。然るに近時米国の児童心理学者カークバト
リック氏は「個性の育成＝児童発達の主観的見解」
という書に於て個性の発達を総合的に見主観的に
見て、其の発達段階の区分も従来のとは多少面目
立場からすれば何よりも児童の発達段階を知るこ
とが必要である。何れの段階にあるかを知って教
養を施すでなければならない有効で無いばかりで
在に害をも生ずる。尤も吾々から見れば、児童の現
在に捉はれて、それを上の段階に導き上げるとい
ふ事を忘れるのは避く可きであるが、その発達程

（52）
経済学を始めとして、社会学や心理学などの分野においても、社会的影響の発達段階の知識は、保育者、教育者、親等に大きな影響を及ぼす。特に教育現場では、発達段階の理解が重要である。ここでは、社会的影響の発達段階の知識を、保育者、教育者の立場から考察する。

わが国での保育、教育の現場においては、発達段階の知識の理解が重要である。特に、発達段階の知識が、保育者、教育者の立場で、子供の発達を支える役割を果たしている。このことは、社会的影響の発達段階の知識が、保育者、教育者、親等に大きな影響を及ぼす、という意味である。

したがって、保育者、教育者、親等には、社会的影響の発達段階の知識を理解することが重要である。このことは、子供の発達を支える役割を果たすため、非常に重要である。
多くの点についてその周囲の人間から決定されるといえるのである。第三期は個性化の時代と呼んで、居って四歳の始めから六歳迄である。此の時期に於て、前の時期に発達した人格が一層明らかに個的となり、他人的特長を棄て取り入れるので、無いといふので斯く命名して居る。第四期以後は学齢以後で兹に述べた所であるが、彼は此の六歳から十二歳迄を競争的社會化的時期と呼び、それから十八歳迄を第五期の青春期又は過渡期と呼ぶ。第六期、十九歳から二十四歳までを青年後期と呼んで居る。かくして此の時期の分は大體に於て一般の身心の発達から區分するものと一致し居るが、彼の見地が自新して注意に値して居る。以下彼が第一期から第三期迄の叙述を通じて見ようと思ふ。

二、前社會時代（満一歳まで）

此の時期の特質。此の時期は身體上及び精神上
の刺戟が主となる影響を興えるに過ぎない。この期の児童の精神生活は主として此の種の刺戟を受け、神経の呼吸を促す事によって発達するので物理的環境に反応する事によって発達するので物理的環境に敏活であるが、精神的環境にはそうでない。かくして此の期間は他人の精神よりも事物の方が大切なる影響を興える唯一の時期で、これ以後は、精神上の変化が起る特化。此の時期中即ち満一ケ年間に児童の身体の大きさは殆ど三倍にもなるので、かえる成長の比例は此の後の時期には見出されない所である。これは身体上ののみでなく、精神上於ても然りて即ち殆んど精神生活を有せない様な状態から、知性於てて高等動物をも凌駕するる域にまで達し、二三の反射的本能的運動をするに過ぎない状態から一躍して手と音声を支配しに得るに至るのである。この一年間に於て児童は欲するものをつかむことが出る、匍匐することが出来、物に捉まって歩くことが出来、若しくは来る
然らんば家庭の暴君となつて仕舞ふ。因より此の期間には善悪を意識しない切れども、次の時期に於て意識的活動に彼の性格に影響を及ぼす様の事はこの時期中習慣づけねばならぬ。かくに於て児童はこの期間に精神的のものとしての影響を受けたくとも周囲の人によって習慣づけられるや否やに導かれるのである。如上はカラクリテック氏が第一期に於ける数養の方針である。身殻上に於ける非當なる注意の必要は何人も異論のない所である。感官練習の注意も亦正當で、その必要は多くの教育家が常的に注意した所である。フレーベルは労働が横臥して居る所に球をつるして置けといひ、ヘンパルトは色々の形のものを吊るさとし居る。視覚の発達と触覚の発達実にこの期に伴って起こるもので、児童は引出しを明けただし絵てを穴に附き込んだりする。本能的は等の活動は感官の練習を